

カレッジ通信

編集・発行

東京建築カレッジ

授業見学
大歓迎！TEL 03
(5950)
1771ますます高まる「時代の期待」、東京建築カレッジ
2024年（令和6年）は「担い手確保・育成」の正念場

木造軸組み2階建ての住宅（躯体）建築を墨付けも刻みも自分たちで行う実習棟実習は貴重な教育実践です。規模に関係なく工務店、建設会社経営者から高く評価されています。今期 第28期実習棟の上棟は1月26日（金）・27日（土）の予定です。

新しい年が始まりました。今年はどんな年でしょう。人手不足が今まで以上に大きな社会課題になり、産業間の人材争奪戦はますます激しくなります。「働き方改革」の本格化は業界構造を変え、企業の淘汰も進むと見られています。

新規入職者の獲得・定着ではきわめて厳しい情勢となりますが、東京建築カレッジには「時代の期待」と呼びたくなる追い風が吹いています。

第一は、「気候危機」（グテレス国連事務総長）の進行下、二酸化炭素の排出削減が社会のあらゆる場面で求められ、木材の利用拡大が進んでいることです。木造建築への新たな期待が高まっています。第二は、日本における住宅建築の主流は木造※であり、担い手の確保・育成が急務であることです。第三は、今後新築戸建て着工は減る一方、既存住宅の再生が住宅市場の主戦場となることです。空き家の再生も課題。ここでの設計・施工では木造建築の高度な知識と技、経験が必要で、カレッジのカリキュラムの値打ちが光ります。

この情勢に確信を持ち、追い風を受ける帆を高く掲げて前進したいと思えます。本年もご支援をよろしく願います。

※「新設住宅着工戸数に占める木造住宅の割合（木造率）」（林野庁『森林・林業白書』）

27期生（2年生）・28期生（1年生）の派遣事業所のセダー建設（株）（大田区）の若杉健志社長は旅行先の長野から1月3、4日、能登半島地震の被災地へ。知り合いの職人さんと一緒に倒壊家屋の応急修理に従事しました（能見市と中能登町で、瓦屋根応急修理や土嚢作りなどを行う）。＝写真

「たまたま年始、長野に仕事の車で行っていたところ、知人社長が新潟から被災地に乗り込むという情報を聞きつけ、私も手をあげて長野から被災地に向かいました」「被災地では、建築関係者の出来ることは多いと思います」。



研修生派遣事業主

「能登半島地震」

倒壊家屋の応急修理に従事

2月4日（日）は体験型オープンキャンパス
ありしくち
手刻みで蟻仕口をつくる！入学相談会も



昨年3回開催した「オープンキャンパス（学校説明会）」を2月4日（日）、臨時に行うことにしました。建築の学校としてのカレッジの大きな特徴は、伝統的な大工技術を学びながら建築のエッセンス（本質）をつかめること。今回の参加者には、手道具による手刻みで「蟻仕口」製作に挑戦してもらいます（予定）。カレッジ教育の魅力の一端が体験できます。傷害保険加入のため事前申込制、参加有料です。会場は江東実習場。くわしくはホームページをご覧ください。⇒



